

生き証人伊藤律

昭和史のナゾを知る男

□□□9



西園寺氏は「政治的意図について重ねて確認したが、中国側は「全くない。人道上の配慮だけだ。」と答えた」と語っている＝横浜市金沢区の自宅で（石田 収記者撮影）

元日本共産党政治局員、伊藤律（左）の生存確認―婦国問題をめぐ

西園寺は言った。「あのころ、今の時点で日本婦国のか」「純然たる人道的措置である。伊藤は高齢で、病弱だ。それに最近日本へ帰りがついている。政治的意図はない」と中国側。

産党は伊藤を「スパイ」と決めつけて除名した後に、中共と昭和四十二年以来の長い対立関係にあるとはいえ、予期せざるダメージを避ける可能性もある。

西園寺は中国側から「一九五一年日本共産党の中央委員会がおほ

味とともに、多くの人の関心を集めている問題である。中国が死亡説の定着しかけていた伊藤律を浮上させた裏には、政治目的が秘められているのか。それとも、単に人道の立場から望郷の念にかられた老革命家の願いを聞きいれただけなのか。ともあれ「北京のやることだから、何かあるはずだ」と、多くの人々に思わせることは、中国ならではであろう。

西園寺が重ねて政治的意図の有無をなしたのに対して、二人は「そういうことは多々ない。現時点で両党関係の緩和のきざしは何らないのだ」とまで語った。

「人道的措置は、それなりに事実かもしれない。だが、伊藤律年間は、日共から入がきて未審し

たこと聞かされた。これは、亡命者集団の当時の最高責任者は現議長、野坂参三である。苦しい説明も、指摘せざるを得ない。さら

当然、中国は計算した

「人道的措置は、それなりに事実かもしれない。だが、伊藤律年間は、日共から入がきて未審し

たこと聞かされた。これは、亡命者集団の当時の最高責任者は現議長、野坂参三である。苦しい説明も、指摘せざるを得ない。さら

「打」と「談」の使い分け

「ここから、北京の対日共ゆきぶりという説が出る。日本共産党は昨年未、ソ連共産党と十五年ぶりの関係正常化に踏み切った。これに対し、昭和四十年の宮本一毛沢東会談決議以来、険悪化した中国共産党との関係改善は進んでいない。そこで、北京はまず「伊藤生存」を明る

たこと、中国流外交の特徴である「打」と「談」の巧みな使い分け、推理してきてはどうかと考へる。目的ははっきり北京にとって利益のあること、すなわち日共との関係改善ではないのか、と思うのである。

北京はまず「伊藤生存」を明る交渉の場に引き出し、境界線

六月月中旬から家族とともに訪中して、西園寺は、二十五日、宿舍の北京・友好賓館に、二人の中国共産党、中日友好協会関係者の訪問を受ける。二人は伊藤の生存と近況、本報送還の方針を伝え、ついで、婦国の股取りや園内に与える影響などを打診した。

その前後、野坂参三（現共産党副議長）や西沢隆二（故人）らが査問した。元産機関勤務員、藤井冠次などという関係者の証言を裏付けたものである。

「ここから、北京の対日共ゆきぶりという説が出る。日本共産党は昨年未、ソ連共産党と十五年ぶりの関係正常化に踏み切った。これに対し、昭和四十年の宮本一毛沢東会談決議以

来、険悪化した中国共産党との関係改善は進んでいない。そこで、北京はまず「伊藤生存」を明る交渉の場に引き出し、境界線

中国のねらい

その前後、野坂参三（現共産党副議長）や西沢隆二（故人）らが査問した。元産機関勤務員、藤井冠次などという関係者の証言を裏付けたものである。

その前後、野坂参三（現共産党副議長）や西沢隆二（故人）らが査問した。元産機関勤務員、藤井冠次などという関係者の証言を裏付けたものである。

その前後、野坂参三（現共産党副議長）や西沢隆二（故人）らが査問した。元産機関勤務員、藤井冠次などという関係者の証言を裏付けたものである。

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

少なくなっていた。ここに日本共

年の中越戦争でも同じ作戦がみられた。

日共との関係改善を中国側が求めるのはなぜか。

ひとつは「反霸権」だ。日本を広範な対ソ統一戦線に引き込む一環として、ソ連サイドに歩み寄った日共の引き戻しである。二つ目は、「四つの近代化」。中国はいま日本から（共産主義者にいわせれば「独占資本」から）資金と技術の導入に懸命だが、ほとんど「日中友好」一色の日本にあつて、中国側と一線を画す日本共産党の存在は何かと不便で不都合に違いない。これはもう少し引き寄せたい—こんなふうに推理する中国研究者もいる。ただ相手は中国のこと、もっと複眼的に世界を見ているかもしれない。

米国では、対ソ政策で頼もしいものの、中国にも敵しいリーガン政権の誕生の可能性が出てきた。一方、日本でも、新日鉄が全面協力している上海・宝山製鉄所などの経験から、中国の期待した近代化がいかに至難の課題であるか

を知って対中慎重論が強まっている。中国の世界政策がすぐ変わる

とは思わないが、北京としては、世界政策を変えざるをえないような国際環境の予兆をみてとり、その場合にも対応できる布石のひとつとして、左翼パイプの復活に今から打ちはじめたとさえなくもない。このさい四人組退放後、中国の実質的最高指導者にのしあがった鄧小平副主席が、対ソ関係では常に表面の勇ましさとは別に、慎重な手配りをしてきていることを忘れてはならないだろう。

人民解放軍兵士に堅く守られた北京の要人居住地区「中南海」の奥深いところで、中国の最高指導部がどんな戦略を語らっているか、もとより知る由もない。「伊藤律生存」は北京戦略の末端をかいまみせたものなのか、それとも政治目的説は、相手が中国ゆえにありがちな、思い過ぎし、にすぎないのか—答えはそう遠くない将来に明らかになると思うのである。

（文中敬称略）
【住田 良能記者】

「反響」読み違えた中国？

東京外国語大教授（現代中国学

・国際関係論）、中島嶺雄氏の話

「中国はいま非毛沢東化とともに、

毛沢東否定の方向で歴史の書き換えをしている。これは中国自身のある種の正常化だ。一方、日中関

係は中国がきわめて満足のいく状態にある。こうしたなかで、中国はソドに刺さった小骨のような伊藤律の問題を解消したかったのだと思う。したがって中国の動機は

意外に単純だったのではないか。

しかし中国は、日本のような情報

化社会で、帰ってきた亡霊とも

いえる伊藤律が引き起こす反響の大きさを読み切れなかったようだ。今の中国にとっては小さな伊藤律問題を、素直な気持ちで解決

しようとはかったが、結果はあまりの波紋に驚いている—ということではないか」